

# 『百人一首図絵』を読む

## ——三番歌について——

藤 川 功 和

### はじめに

『百人一首図絵』は、文化四年（二八〇七）に刊行された、『百人一首』の絵入り注釈書です。「歌仙絵」と歌人達の「古説系図」と身分ごとく作者を分類した「百人一首作者部類」とを一冊に纏めたものと、一首ずつの歌の内容を絵で表した「歌意絵」を纏めたもの二冊の計三冊で構成されています。『百人一首』関連の書籍は江戸時代に数多く刊行されていますが、それらの中でも本書は歌意絵の独自性等から、先学によって注目されています。今回は、三番歌の柿本人麻呂を取り上げてみたいと思います。

### 一 三番歌の歌仙絵・古説系図・歌意絵

#### —翻刻と語注—

まずは、三番歌の歌仙絵、古説系図、歌意絵の翻刻と簡単な語注を、図版と併せて以下に示します。

#### 凡 例

一、尾道市立大学附属図書館蔵『百人一首図絵』

[911.1 / Ta98] を底本とした（書名の表記は

外題による）。

一、歌仙絵、古説系図、歌意絵の各図版と翻刻本文を掲載した。

一、翻刻に際して、以下の処理をした。

・字体は適宜あらため、ルビは底本のままとした。  
 ・行取りは適宜あらため、読解の便を考慮し、句読点、濁点等を付した。また、割注には（）を付した。

【歌仙絵・古説系図・歌意絵の翻刻】



【翻刻本文】

柿本人麻呂かきのひとのひとまろ（光照天皇皇子。天押帯日子命あめおしたしひこのみこと）  
 後父祖不詳（まびらかならず）  
 足引の山鳥の尾のしだりをのながながしよをひとりかもねん

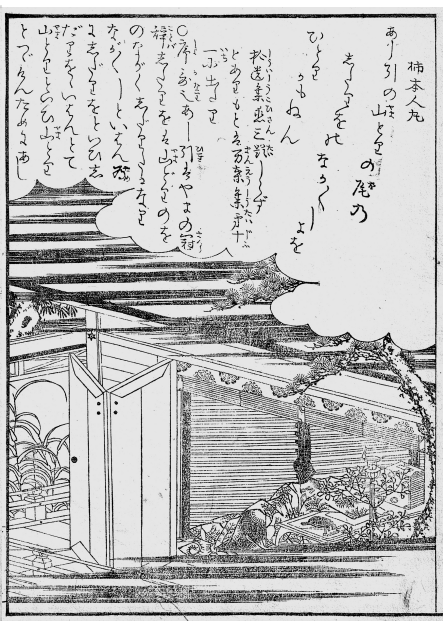
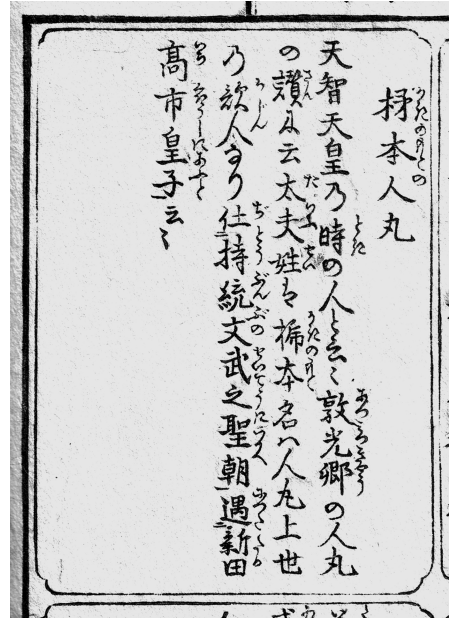
柿本人丸

天智天皇乃時の人と云く敦光卿の人丸の讚云太夫姓も柿本名へ人丸上世り欲人有り仕持統文武之聖朝遇新田高市皇子云

〔翻刻本文〕

柿本人丸

天智天皇の時の人と云々。敦光卿の人丸の讚に云、太夫。姓は柿本、名は人丸。上世の歌人なり。仕持統文武之聖朝、遇新田高市皇子云々。



【翻刻本文】

① 柿本人丸

あし引の山どりの尾のしだりをのながくしよを  
ひとりかもねん

拾遺集恋三 題しらず

とあり。② もとは万葉集第十一に出たり。

○ ③ 序哥也。④ あし引はやまの冠詞、しだりを

は山どりのをながくしだりたるなり。ながく

しといはん為にしだりをといひ、しだりをいひ

んとて山どりといひ、山どりとつゞけんためにあ

しびきとおけるなり。⑤ 上の句は序にて意なし。

たゞ下の二句のうた也。⑥ うたのこゝろは、かく

ばかりながきよをおもふひとにもあはで、ひとり

かもねんとすらんとうちなげきなる也。⑦ ふるき

うたのすがたにて、たけたかく神妙なるうた也。

⑧ 六帖に

あきかぜのふくよる毎に山鳥のひとりしぬれば

物ぞかなしき

【語注】

① 柿本人丸―生没年未詳。持統・文武両天皇に仕え

る宮廷歌人であったとみられる。『万葉集』から

石見国に赴任していたことなどが知られる。万葉

歌人を代表する存在であり、『万葉集』は長歌、

短歌を採録する。後に歌聖として歌人の尊崇を集

め、中世には人麻呂の影像の下で歌作する「人麿

影供」が行われた。

② もとは万葉集第十一に出たり―原歌が『万葉集』

に「或本の歌に曰く」としてみえる作者未詳歌で

あることを指摘する。なお同様の指摘は、『百人

一首改観抄』等にも見える。

③ 序哥―ある詞を導き出すために音やイメージの上

の連想からその前に冠する修辞のことば。枕詞と

同じ機能を有するが、音数に制限がない。

④ あし引はやまの冠詞―山どりとつゞけんためにあ

しびきとおけるなり―同様の指摘は『百人一首師

説秘伝』に「あし曳ハ山の枕詞也。山ハやまどり

といはん為也。しだり尾ハ尾のうちすぐれて長き

尾を云。是迄ハ序也。只ながくし夜をといはん

為なり」とみえる。

⑤ 上の句は序にて意なし。たゞ下の二句のうた也―

上の句は序詞で下の句の「長い」を導き出すために機能することを指摘する。

⑥うたのこゝろはうちなげきなる也―秋の夜長を恋しく思っている人と離れてただひとり寂しく寝ることの嘆きを詠んだものとする。

⑦ふるきうたのすがたにて、たけたかく神妙なるうた也―永青文庫蔵『百人一首注』に「詞のつゞき妙にして風情尤長高し」とみえる。また『百人一首諺解』に「上代の人情にあらざればかゝる詞はあらはれじ」と見える。

⑧六帖に「物ぞかなしき―『古今和歌六帖』所収「秋風のふきよるごとに山鳥のひとりしぬればものぞかなしき」(第二・九二五・山鳥)を指す。「百人一首」の古注釈では、『百人一首三奥抄』が、「山鳥のひとりぬめることは六帖歌にも」として同歌を引く。なお『古今和歌六帖』では、山鳥を詠じた和歌が以下のように採録される。

山どり

雲のゐるとほ山鳥のよそにてもありとしきけば  
わびつつぞぬる

あしひきの山鳥の尾のしだりをのながながしよ  
をわがひとりぬる

秋風のふきよるごとに山鳥のひとりしぬればものぞかなしき

ゆふされば君をまつちの山鳥のなくなぬるを  
たちもきかなん

## 二 歌意絵を読む

歌意絵の右下には、烏帽子を被いたうつむき加減の人物が描かれています。齢を重ねたように見えるその人物は、机に寄りかかるようにして目を閉じています。また、机の奥側には帙に収められた書物のようなものが置かれています。紙燭に灯がともっているように見えますので、「ながながし夜を一人かもねむ」という情景を絵画化したものと思われます。では、まどろんでいる人物は誰なのでしょう。断定はできませんが、詠者である柿本人麻呂を描いた可能性があるとされます。





『百人一首絵抄』(嘉永三年〔一八五〇〕刊本)



『秀玉百人一首小倉栞』(嘉永三年〔一八五〇〕刊本)

ところで、『万葉集』には、人麻呂が妻との離別を嘆じた詠が散見されます。

柿本朝臣人麻呂、石見国より妻を別れて上り来る時の歌二首并せて短歌

石見の海 角の浦回を 浦なしと 人こそ見らめ  
渦なしと一に云ふ「磯なしと」 人こそ見らめ  
よしゑやし 浦はなくとも よしゑやし 渦は  
一に云ふ「磯は」なくとも いさなとり 海辺を  
さして きたづの 荒磯の上に か青く生ふる  
玉藻沖つ藻 朝はふる 風こそ寄せめ 夕  
はふる 波こそ来寄れ 波のむた か寄りかく  
寄る 玉藻なす 寄り寝し妹を一に云ふ「はしき  
よし 妹が手本を」露霜の 置きてし来れば こ  
の道の 八十隈ごとに 万たび かへり見すれ  
ど いや遠に 里は離りぬ いや高に 山も越  
え来ぬ 夏草の 思ひしなえて 偲ふらむ 妹  
が門見む なびけこの山

反歌二首

石見のや 高角山の 木の間より 我が振る袖  
を 妹見つらむか  
笹の葉は み山もさやに さやげども 我は妹  
思ふ 別れ来ぬれば

『万葉集』卷第二・一三二〜一三三

つのははふ 石見の海の 言さへく 辛の崎な  
る いくりにそ 深海松生ふる 荒磯にそ 玉  
藻は生ふる 玉藻なす なびき寝し児を 深海  
松の 深めて思へど 寝し夜は いくだもあ  
らず 延ふつたの 別れし来れば 肝向かふ  
心を痛み 思ひつつ かへり見すれど 大舟の  
渡の山の もみち葉の 散りのまがひに 妹が  
袖 さやにも見えず 妻ごもる 尾上の一に云  
ふ「室上山」山の 雲間より 渡らふ月の 惜し  
けども 隠らひ来れば 天伝ふ 入り日さしぬ  
れ ますらをと 思へる我も しきたへの 衣  
の袖は 通りに濡れぬ

反歌二首

青駒が 足掻きを速み 雲居にそ 妹があたり  
を 過ぎて来にける一に云ふ「あたりは 隠り来にけ  
る」  
秋山に 落つるもみち葉 しましくは な散り  
まがひそ 妹があたり見む一に云ふ「散りなまがひ  
そ」

『万葉集』卷第二・一三五〜一三七

引用した長歌二首とそれぞれに付随する反歌二首は、いわゆる「石見相聞歌」<sup>3)</sup>で、題詞から、人麻呂が妻と別れて石見国から上京する際に作ったとされていきます。いずれも石見からの道中であって、現地に残してきた妻への思いを述べていて、国司の任期が果てて帰京する際の、妻との今生の別れを詠じたとする説があります。

また、『万葉集』には他にも人麻呂が死に際して詠じた「鴨山の 岩根しまける 我をかも 知らにと妹が 待ちつつあるらむ」(巻第二・二二三)がみえ、自分を待ち続けているであろう妻に思いを馳せたものと解されます。

これらの詠が、人麻呂の実体験に基づくものなのか、フィクションと考えるかでは、今なお見解が分かれるところですが、遠く離れた妻を思い、一人嘆く人麻呂の姿が『万葉集』に繰り返し看取されることから、いつしか人麻呂に独寝のイメージが結びついていて、今回の図絵の歌意絵が、「なが／＼しよをひとりかもね」る視点人物を人麻呂その人と解して描かれた可能性はないでしょうか。

そして、もしそのような歌意絵の読み取りが成り立つのであれば、歌意絵の作者は、「あし引の山と

りの尾のしだりをのなが／＼しよをひとりかもねん」を人麻呂自身の心情が詠み込まれた和歌として理解するように読者を誘っていると言えるのかもかもしれません。

『百人一首図絵』の他の歌意絵に同様の例がないか、さらに探ってみたいと思います。

\*図版は、尾道市立大学附属図書館所蔵本を用いた。また、和歌の引用は、『万葉集』は『万葉集』訳文篇(昭和四七年 塙書房)を、その他は『新編国歌大観』を用い、適宜表記等をあらためた。

#### 【注】

(1) 松村雄二氏『百人一首 定家とカルタの文学史』(平成七年、平凡社)、鈴木健一氏「描かれた百人一首の世界 歌意絵の変遷をめぐって」(『ユリイカ』第四四巻第一六号、平成二四年二月、青土社)。

また、宮本祐規子氏「田山敬儀『百人一首図会』翻刻(一)」(『会誌』第三二号、平成二五年四月、日本女子大学大学院の会編)、「田山敬儀『百人一首図会』翻刻(二)」(同三二号、平成二六年三月)、「田山敬儀『百人一首図会』翻刻(三)」(同三三三号、平成二七年三

月)において歌意絵の翻刻がなされている他、アマゾン Kindle 本『田山敬儀註釈 百人一首図絵(文化四年版)―影印・翻刻』(玩究隠士 編集・翻刻 令和二年)において全文の翻刻を閲覧できる。

(2) これまでに取り上げた歌人は以下の通り(アラビア数字は歌番号、○内の漢数字は本誌号数)。

- |                |               |
|----------------|---------------|
| 1 天智天皇 (十)     | 2 持統天皇 (八)    |
| 4 山辺赤人 (四)     | 7 安倍仲麿 (九)    |
| 11 参議篁 (四)     | 12 僧正遍昭 (九)   |
| 13 陽成院 (十一)    | 14 河原左大臣 (九)  |
| 15 光孝天皇 (八)    | 16 中納言行平 (八)  |
| 17 在原業平朝臣 (八)  | 19 伊勢 (八)     |
| 23 大江千里 (十)    | 29 凡河内躬恒 (四)  |
| 33 紀友則 (四)     | 38 右近 (四)     |
| 40 平兼盛 (八)     | 41 壬生忠見 (九)   |
| 43 権中納言敦忠 (四)  | 44 中納言朝忠 (四)  |
| 50 藤原義孝 (八)    | 51 藤原実方朝臣 (八) |
| 55 大納言公任 (九)   | 60 小式部内侍 (四)  |
| 61 伊勢大輔 (九)    | 62 清少納言 (四)   |
| 63 左京大夫道雅 (十二) | 64 権中納言定頼 (八) |
| 65 相模 (十三)     | 66 大僧正行尊 (十)  |
| 67 周防内侍 (十)    | 69 能因法師 (十)   |

- |               |                   |
|---------------|-------------------|
| 79 左京大夫頭輔 (九) | 80 待賢門院堀河 (十二)    |
| 84 藤原清輔朝臣 (十) | 88 皇嘉門院別当 (十)     |
| 89 式子内親王 (十二) | 91 後京極摂政太政大臣 (九)  |
| 93 鎌倉右大臣 (九)  | 94 参議雅経 (十)       |
| 95 前大僧正慈円     | 96 入道前撰政太政大臣 (十四) |
| 97 権中納言定家 (十) | 98 従二位家隆 (十)      |
| 100 順徳院 (九)   |                   |

\*各号の発行年は以下の通り。第四号(平成二五年一二月)、第八号(平成三〇年二月)、第九号(平成三一年二月)、第十号(令和二年二月)、第十一号(令和三年二月)、第十二号(令和四年二月)、第十三号(令和五年二月)、第十四号(令和六年二月)

(3)『和歌文学大辞典』(平成二六年 古典ライブラリー) 参照。

### 〔付記〕

本稿は、令和六年度尾道市立大学学長裁量教育研究費による研究成果の一部である。

―ふじかわ・よしかず 日本文学科教授―